

私は2週間、伊賀先生の診療所で実習をさせていただきました。様々なことを学ぶことができましたが、そのすべてについて述べると何が言いたいのか分からなくなると考えましたので今回はいくつか絞って述べたいと思います。

1) 考えて発言しろ

これは伊賀先生からよく言われた言葉です。特に最初の1週間は私が何を発言してもこの言葉が返ってきました。最初はこの人は何を言っているのだろう？と不思議に思っていました。徐々にその意味を理解することが出来たのではないかと思います。

そもそも「考える」という言葉の定義がはっきりしません。これを読んでいる皆さんは「考える」をどのようなものとして捉えているのでしょうか？例えば「知る」と「考える」は別でしょうか？教科書で初めて見る病気について勉強したとします。この病気の病態やそれに対する治療法についての記述を今まで学習してきた基礎医学の知識を利用して理解することは「知る」ことなのでしょうか？それとも「考える」ことなのでしょうか？「思う」こと、「考える」ことは別でしょうか？証明する前に直感から仮説を立てることは「思う」こと、「考える」ことのどちらでしょうか？今までにないまったく新しいものを生み出したり発明したりすることが「考える」のでしょうか？定義を考えることは客観的に物事を捉える上で非常に重要です。

最近読んだ外山滋比古著、『思考の整理学』の冒頭にこのような文章があります。

(学校の生徒は、先生と教科書にひっぱられて勉強する。自学自習という言葉こそあるけれども、独力で知識を得るのではない。いわばグライダーのようなものだ。自力では飛び上がることはできない。グライダーと飛行機は遠くからみると、似ている。空を飛ぶのも同じで、グライダーが音もなく優雅に滑空しているさまは、飛行機よりもむしろ美しいくらいだ。ただ、悲しいかな、自力で飛ぶことができない。学校はグライダー人間の訓練所である。飛行機人間は作らない。＜中略＞しかし、現実には、グライダー能力が圧倒的で、飛行能力はまるでなし、という‘優秀な’人間がいることも確かで、しかも、そういう人も‘翔べる’という評価を受けているのである。)

結論から言いますと私の考える伊賀先生の「考える」とは、教科書に記載されているような事実がいかんにして生み出されたのか、基準をはっきりした上で本当に正しいのか、証明するために必要な方法としてどのようなものがあるの

か、それは妥当なのか、自分の仮説を導く論理的根拠とは何なのか、なぜうまくいったのか、なぜうまくいかなかったのかなどについて思いをめぐらすことを指しています。

ではなぜ伊賀先生はここまで「考える」ことに固執するのでしょうか。医師には必ず飛行能力が必要であるのにも関わらず現在の学校教育ではグライダー人間ばかりが作られているという現実に対して、何とかしたいという先生の思いがあるのではないのでしょうか。飛行能力のないグライダー人間は永久に、教えてもらう先生の上を‘翔ぶ’医師にはなれないのです。

2) 病気ではなく患者を診るということ

これはよく言われる言葉です。しかし私たちは、学生の時の実習や医師になってからの研修を大学病院などの大病院で行います。日本の大病院では患者さん一人に対して長い時間をとることが物理的に不可能です。また、大学病院は研究を行う場でもあります。医学の発展のために治験を行い、最新の施設を利用することで病気を治し延命しようとするといったことが当然という世界です。

一方で伊賀先生は患者さんの死生観を大事にします。患者さんに、どのようにして死にたいかと尋ねます。病院でチューブにつながれて延命するのが嫌だ、という人には無理に治療は勧めません。自分にもしものことがあったらどのようにしてほしいか、ということについて家族と話し合うように勧めます。これは大病院では考えられないことです。

私はどちらかが正しくてどちらかが間違いと言うつもりはありません。病気を治そうと努力し研究する医師、それに協力してきた患者さんのおかげで現在の高度な医療が存在します。患者さんの人生観を大切にして医師が目の前にいる患者さんの幸せを第一に考えるというのも素晴らしいことです。問題なのは私達のような若い学生や医師が前者の考えの中で教育され、後者の考えに触れる機会が極端に少ないということです。絶対的な正解はありません。どちらの考えにも触れた上で自分なりの答えを考え続けることが大事なのではないでしょうか。

3) 心音について

最初は収縮期雑音すら分からなかったのですが、完全房室ブロックや拡張期雑音、クリック音も最後には聞くことができました。どれも聞いた時は非常にうれしかったのですが、患者さんの心音と対比することで正常の心音を理解できるようになったのではないかと思います。例えば私たちは生理学で正常を学

んでから臨床で病気を学びます。しかし、正常というものは病気を理解し、対比することで初めて深い理解が得られるものだと私は考えます。事実、私は5年生になって基礎医学を勉強しなおしましたが、臨床を学んでから基礎医学を勉強すると色々な発見があります。心音の聴取はそのことを再確認し、これからの勉強においての教訓となりました。近道はありませんがこの教訓を忘れず、常に正常との違いをイメージしながら他の身体診察について学んでいきたいと思えます。

4) 想文を毎日書くということについて

他の人（研修にきていた学生さんのこと）がどんな文章を送っていたのか知らないのですが、2週間毎日伊賀先生にその日の感想を送り続けました。生意気だったかもしれませんが伊賀先生に反論し、自分の意見を主張することができた点は非常によかったと思います。やはり自分の意見を強く主張すること、間違いを素直に認めることは日本人には難しいですが重要です。本来自分の考えをまとめて文章にすることで頭を整理させるというのが目的だったと思うのですが、感想文というよりも交換日記となっていたため私にとっては上記のメリットが大きかったと思います。

5) 医学を学ぶことは楽しいということ

これは実習を行う前の目標で私が言い続けていたことです。私の表現力が足りないため、そのことについてうまく表現できませんでした。ここは尊敬するスティーブジョブズの文章をお借りしたいと思います。

(Your work is going to fill a large part of your life, and the only way to be truly satisfied is to do what you believe is great work. And the only way to do great work is to love what you do. If you haven't found it yet, keep looking. Don't settle.)

医学の楽しさは他人が言うより自分で実感するしかないかもしれません。どういった点に興味を持つかは人それぞれかと思いますがまだ医学を学ぶことが楽しいと思えない人はぜひ探し続けてください。立ち止まらないでください。

私も探し続けたいと思います。

Keep looking. Don't settle!

<この2週間でどう生かすか>

この2週間で学んだことはたくさんあります。心音もかなり聞けるようになりました。心電図もある程度読めるようになりました。しかしそれはあくまで

1つの例にすぎません。大事なことはこれから医師になる上で、常に科学的な観点で物を考え、病気を治すことと患者さんを診ることについて考え続ける姿勢を持つことです。

最後にこの2週間でお世話になったすべての人に感謝したいと思います。伊賀先生や御家族、スタッフの皆さん、在宅医療を見学させて頂いた大西先生ありがとうございました。患者さんには長い時間、僕の聴診に付き合ってもらい、病気が発症した時のことを何回も話してもらいました。わざわざ僕のためにもう一度診療所に来て頂いた方もいました。これから医師になる上でこの経験を糧に頑張りたいと思います。本当にありがとうございました。

私から)

当方に研修にくるまえ、患者さんから勉強させてもらうのだから最低、診察を淀みなくできることと、正常所見を多くきいて、理解できておくようにと伝えていました (<http://www.kcn.ne.jp/~igakan/HMC/kougi.htm>)。最初にかれが来たとき、「何人、正常をみた?」、ときいたら、彼曰く「3人です。そんなに多くみるのは無理です」と。その時、私は研修前の講演等で彼に、正常をきちんと理解する必要性と、それが患者をみせてもらうエチケットであるということをわからせることはできなかったのだと思いました。数時間かけて、学生さんに motivation あげるように講演したにもかかわらず (<http://www.kcn.ne.jp/~igakan/2010/OMC.files/frame.htm>)、彼のみた正常人は3人ということととっても残念に思いました。しかし、その後は、異常所見をきかせることにより、正常所見の理解が必要だと感じていったようです。こういう、学習の進め方もあるのだと思いました。(患者さんに対するエチケットという観点からは同意できませんが、、、)。

とってもうれしかったことがあります。初めは、なかなかいうこときかない、頑固な学生だと思っていました。研修10日目に、医師会の循環器カンファレンスに連れて行きました。VTとPAT (wideQRS) の体表面心電図での鑑別の講演があったとき、彼は最後に「どうやって、VTとwideQRSのPATであると答えがわかったのですか」という質問を私にしました。Gold standardを何にしているかという、きわめて重要なことを、私がしつこく、「なぜ、どういう根拠で、、、」という質問のなかで、気づいたのだと思います。2010-5-31